

各協同組合からのお知らせ

MELON の協力団体である各協同組合が取り組んでいる、環境に関する情報をご紹介します。

宮城農業協同組合中央会から

JA グループ「みんなのよい食プロジェクト」

これからの日本人にとって本当に「よい食」とは何かを日本の農家、JA グループ、そして消費者みんながいっしょになって考え、行動していく運動です。宮城県内でも各地で「よい食」を考えるきっかけづくりが始まっています。

■「国産」を本気で考え、実践する運動です。

日本の食料自給率はカロリーベースで40%、主要先進国中最低水準にあります。食料自給率の向上と日本の農業・農家を元気にするためには、国産農畜産物の消費拡大が必要です。この運動では、一人ひとりが本当に「よい食」とは何かを深く考え、やがてはみんなが国産農畜産物を選ぶことが当たり前となる、そんな世の中を目指していききたいと思います。

■「よい食」で農家も消費者も元気になる。

生活の中で、毎日の食卓で「食」を話題にすることで、その向こうに「農」が見え、「食」と「農」の距離が縮まっていくはず。この運動が広がっていけば国産農畜産物の消費拡大への大きな流れが定着し、農家も消費者も元気になっていくことは間違いありません。

■地域から全国に広げよう

地産地消や食農教育など身近な取り組みも「みんなのよい食プロジェクト」といえます。みんなで楽しく、力強く、地域から全国に大きなうねりを起こしましょう。



みんなのよい食プロジェクト
シンボルマーク美味ちゃん

みやぎ生活協同組合から

秋の“こ～びの森”に行ってみよう！

～ツル切り体験会～

周囲の自然観察を行いながら、ツル切りなどの森の手入れ作業を行い、秋の里山を楽しみます。切り取ったツルでリースなどを作することもできます。親子での参加も歓迎です！小雨実施の予定です。

“こ～びの森小塚山” (丸森町)

時期が合えば森の恵の栗拾いも楽しむこともできます。
【実施日】9月26日(土) 【応募締切】9月18日(金)
【集合】10:15 阿武隈急行「あぶくま駅」
*仙台駅 9:11 発 梁川行きに乗車すると便利
【解散】13:40 あぶくま駅 (予定)
【参加費】500円 (中学生以下半額、未就学児無料)
【昼食】おにぎり汁物を用意しています
【持参物】飲料、軍手、敷物、雨具、鎌か剪定ハサミ
【募集人数】50人 (応募多数の場合は抽選)

“こ～びの森永倉山” (仙台市泉区)

秋の草花やキノコを探しに出かけて見ましょう。
【日時】10月17日(土) 【応募締切】10月9日(金)
【集合】8:50 仙台駅西口バスプール (中型バス乗車)
現地近く根白石での集合もあります (9:40 集合)
【解散】15:30 仙台駅 (予定)
【参加費】500円 (中学生以下半額、未就学児無料)
【持参物】昼食、飲料、軍手、敷物、雨具、鎌か剪定ハサミ
【募集人数】40人 (応募多数の場合は抽選)

申込方法 住所・氏名・電話番号、企画名を明記し、ハガキ・FAX・メールのいずれかで下記までお申込ください。
〒981-3194 仙台市泉区八乙女 4-2-2
みやぎ生活協同生活文化環境活動事務局
TEL 022-218-3880 FAX 022-218-3663
E-mail sn.mkankyok@todock.jp



**MELON20 周年をめざせ！
50 人リレートーク**



第27回目の執筆者

呉地正行さん
(日本雁を保護する会会長・MELON 理事)

宮城県北部の伊豆沼・内沼、蕪栗沼などは、県鳥の雁をはじめ、多くの水辺の生き物の生息地となっています。またこれらの生き物にとって沼と同様に重要なのが田んぼです。

水を張り、その湿地機能を活かし、稲を栽培する田んぼには、2つの顔があります。ひとつは農地としての顔で、もうひとつは湿地としての顔です。田んぼの多くは自然湿地を干拓した農地ですが、その湿地機能を活かせば、何千年にもわたり利用可能な農地となることをアジアの歴史が証明しています。

一方、20世紀後半の四半世紀に生産性と効率性だけを重視した圃場整備と農法が普及し、田んぼの湿地機能は著しく低下し、田んぼの生き物の多くが姿を消しました。

この反省から、湿地機能を回復し、水辺の生き物と共生した田んぼをめざそうという運動が始まりました。そのひとつが、私たちの呼びかけで蕪栗沼周辺で始まった、雁や白鳥との共生をめざす「ふゆみずたんぼ」で、現在は新たな農法として全国各地に広がりました。

この取り組みは、世界の湿地の保全と賢明な利用をめざすラムサール条約でも注目を浴びています。第9回会議(2005年、ウガンダ)では、「蕪栗沼・周辺水田」が、周辺水田を広く含む世界で初めての条約湿地となりました。また第10回会議(2008年、韓国)では、私たちを含む日韓 NGO が支援を行い、日韓政府が共同提案した「湿地システムとしての水田の生物多様性の向上」という決議が採択され、蕪栗沼での取り組みは今や国際的な潮流を生み出す源となっています。

… 次号執筆者紹介 …

佐々木修一氏
長沼水環境ネットワーク発起人会事務局

